

随 想

## “熟度及ばず”に

林 文子

堂々めぐりの考えごとに心を奪われて、いつまでも同じ場所にたたずんでしまう。まことに侘しい。秋風落莫たる人生をおそれて、少々、取り越し苦労をするようにもなった吾が心の弱さをみつめる。

これまでは、ときに大仰に嘆き愚痴ることはあっても、落ち込むほど深刻に悩むことが少なかったのは、持って生まれた陽性の性格よりも、仕事を与えられた恩恵に他ならない。有難いことに、仕事の意義を愛し誇りを持って働くことができた。夢中で走り抜けてきたような、心地よい満足感をいだいて定年を迎えた。感無量の境地である。

今は、与えられた仕事に力をつくして生活に弾み(ハズミ)をつけ、一日の終りに少しばかりの疲れを覚えて、素直に眠る幸せを感じず暮し方を模索している。苛立ちの行動は、自律神経の退化に拍車をかけることになる。むやみな苛立ちは「心の癌」とであると自覚している。悠々自適の心構えで、自分の生活の目標を見失わないよう努めたい。

“年齢に分別が追いつかぬ世になった感の深い昨今である。……、寿命が延びて、熟成ペースが間延びしたみたいなの、昔の50、60歳に比べると、今の同年代は熟度及ばずでは……”とは、先頃の「中日」春秋欄のことばである。恥ずかしいが、“熟度及ばず”にいる私だから、せめてこの先を悠々長生きしたい。

「生」への執着と云うか、私は、これからの未だ見ない世界に興味がある。やはり、これまでのように、人々のなかに居て、人々の社会規律に従って生活してゆきたい。出来るかぎり、地球規模の夢を抱いて、思う存分活躍してから召されたい。つまり、「自立した人生を自律して生きて生きたい」。そういう長生きを願っている。

(健康文化振興財団理事長)